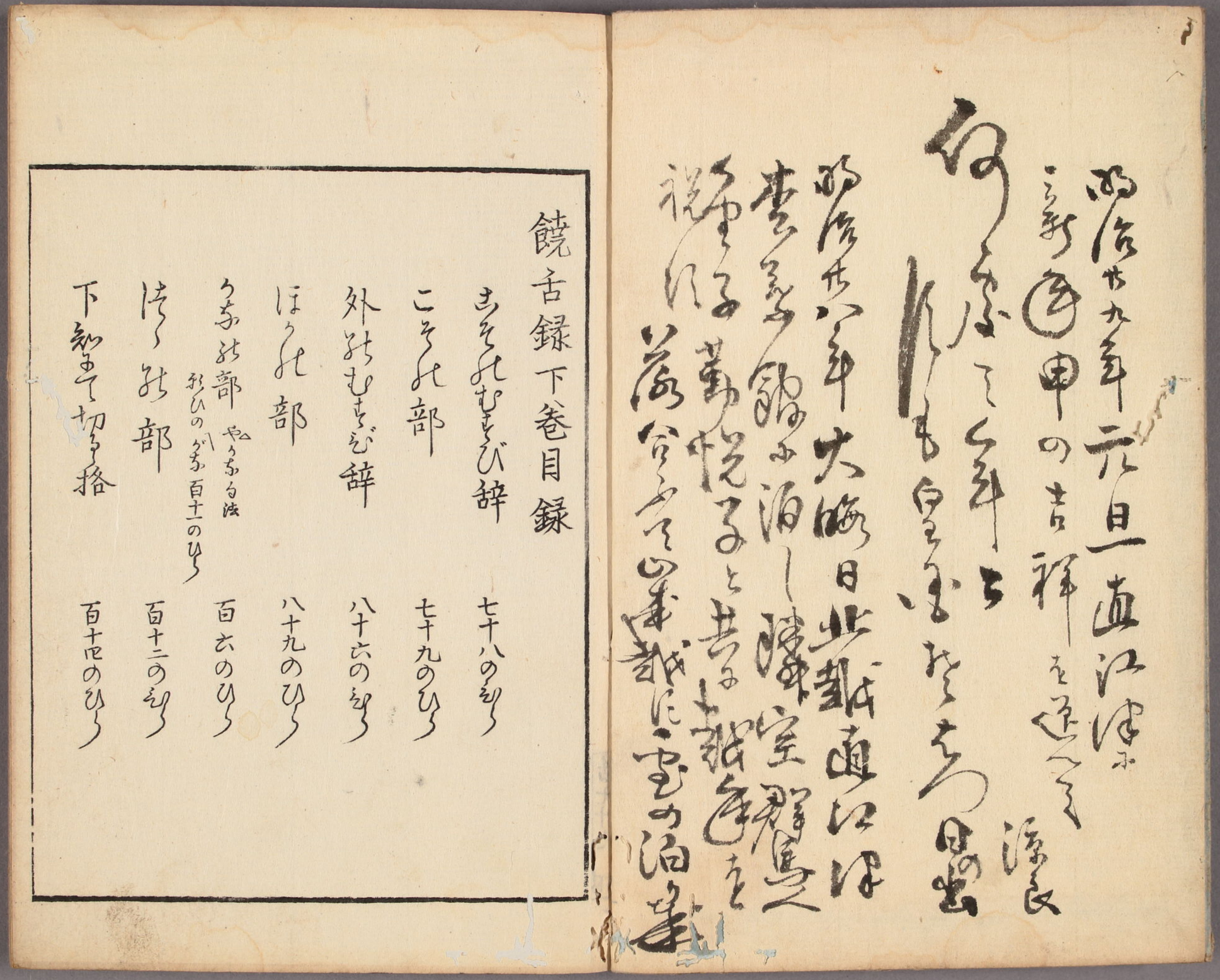
俳諧饒舌録

下



饒舌録下巻目録

さとしむすび辞　七十八のゑ
こそあど部　七十九のひ
外れむすび辞　八十六のゑ
ほうれ部　八十九のひ
うるはし部　やうるはし法　百六のひ
形ひのゝ　百十一のひ
はうれ部　百十二のゑ
下知まて切り格　百十四のひ

ホ□そ部　百十七丸印
余情をふくめる例　百十八のひら
正親白　百二十一のひら
五十字韻　百二十二丸印
無季發句　百二十四のひら
物乃名　百二十五丸ひら
廻文發句　おなじ印

饒古録下巻

元木阿弥著

こそたむもとび詞

け

かけ　ひけ　こげ　せけ　きけ　かけ　ふけ　さけ　ゆけ　たけ
やけ　おけ　ふげ　ふげ　のげ　さげ　あげ　いそげ
たけ　あぶむけ　けもあひひろぐ　のそふきれけをつく

せ

させ　こせ　やどせ　ひろせ　ませ　ふせ　ふけせ　かそせ
くせ　ふぶせ　のこせ　ちせ　ふせ
けもあひのぼれたふきれぜをつく

て

まて　ふて　ふて　そて　そて　そて　そて　こぶて
けもあひのつけそふきろてをつく

ね

きふね　ろかきね　いそね　りもか称　ちふねせねこね
けた　ふひふぬのそふきけぬをつく

上ぞの中　ぬのふきてふる時ハちふぬ　ろぬ　きふぬしむもぶ格く

へ

ゑ　ゑ　ゑ　

こそ部　けせてねへめれ

け

紅乃糸とこそきけ鹿の声　英夫

是ハ糸の事なれども鹿の声とこそ聞けと切る

松き君りくゞ袖だりをやこそらんなどハ多をもかねてこそきけ

セ

かぞへても年こそかくせ除夜の豆　図夕

是ハ除夜の豆なぞへても年こそかくせと切る

除夜　年ゆくとぬ命分とおりへく秋の夜をかこそおくせおきねかぐ

是ハ下よりこの句は下へくちくておきねかぐ

らぬ命くこそあせと為るこそ

て

山里ハ花よこそ中て都人　清風

是ハ都人ハ山とハ部よこそまでとかる

古今　宮城野のをゝ行の萩　歌をおもし風を待こと歌をこそよそ

ね

二つこそ来老よハ為ね年の雪　落柏

是ハ二つ来ることこそ老よハ為ねと切る

ね

是ハ初鰹こそ飯小花まきねを川鰹　蓼太

是ハ初鰹こそ飯よまるれねと切る

ね

あぐ神のたこそたこそ雲雀　嵐亭

是ハ雲雀こそたこそのたこそと切る

古今　春ハ来の園ハ梅ハ香ハ

是ハ春ハ園ハ梅ハ香ハ

へ

煙を掃家こそ人物をひ　北夕

是ハ掃ひ煙をこそ家こそ人物をこそと切る

古今　折つれバ袖こそ匂ふ梅の花ありやこそふるひまれおく

め

蓬を煮て濾すこそせまめ夕時雨　其角

是ハ夕さるれみのを煮て濾すこそせまめと切るう

匡横　まれみるよんをぞぶるもやゝめ形ハ茎ハつまで手をこそ入めめ

め

炭焼のおれが妻こそ黒うゝめ　重五

古今　夕月夜おぐつゝあきを引てげうるんて浦ハあけてこそえめ

是ハ引んのたゝきん

日　大原や〻をしたの山もゆるもこそい神代のゆもおもひいづ〻えん

是ハおもひいづんのこと

日　逢ぢのかゝることこそこゝめ涙ようゝがとゞありそう

是ハ引んのこと

日　わぶ〻こそおもへん中ハえあれなあそぶふなの三もれてこそ

是ハおもへんのこと　ふとこそ

日　ちりぬれば高ゆれど高ゆるなき物とゝふことを桜をてぶれてめ

是ハ引んのこと　くもびのめ〻むの

たゝきくされどつゝもゝ何を下へで

くる時とをゆゝりて引ゞもと云る時ハ引ん

どもよいふひゞくれ故引めどもとゝつく

一古今　ゆゝも秀も同じむゝに浮らゆゝど年ゆるんゝあゝくゝまりゆる

日　けゞ〻〻〻ゞと交てゝつゝる時のゝハ引めゞゝふく

花の香ハ行ゝぶらめども咲ゆゝゝ　ゆにしこのこなる時もゞれ

是もゆゝぶらめ

ちゝゝゝゝんどもとゝいひゞゝれば引んをめゝ

めゝれゝゝゝゝ

[illegible]

元日小田毎の日こそ高しーなれ　大安紙

[illegible]あらそへれば人あぐられ深ふる今ハ声こそきゝまさりーなれ

●そのそぶる白

●ひゞん報ふ迎ふれさゝ狩

●門無もさゝらいでおうれ

是ハ上ふ引そともあきふれ　くゆるるがそのそれ

古今

逢ふ人をぞ思ふそまちぶれみあせ川あのふるあておもひそあるん

是ハ下の句ん　そ切ゝ

[illegible]

[illegible]ごかせバ月こそづれ鶯さゝ　蓑太

是ハちる梅ゝごかせバ月こそづれ鶯ふり

日

沖津波ちる所のちるれ深ねのゝこそ君をまちつゝふこれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

下句ニハ

●俤もとゝ茶を下こそ時なれ　とあり

是ハ写〳〵俤りあるべし　それや髪引そ示りうりて

引ふと留りうる例多〳〵又下句

●什人数舟あれば こそ　とあり

是もおなじ同じ　されば写本の方を用ふ上りこそ

みてうりてもそもそもそもそび詞そむもそび下よの外

本のうりまて引ふともつい　ともつうう

連哥の多白よ

袖よこそ契れ　ふをる神うう

是ハこそをれとむそ　れとむそび　れば下よ引ふともそう

又耳底記よ

されば　て前よ　思ひ　野うう

是もこそを　ふの　てむそび　れば下よう

ともいうう　分れ例　ようう　ふべ　花方を　ん

古今　爰ととそ　ふべ　れ世中　ふう　とあ　ひけ　う

月　岩ゆく　水の　波立　りか　こそ　ら　び　あう

千載　さもこそ　ハ紅　ぶむべき　春あ　れど　ぬあき　ふ日　う

拾遺　ほとこそ　ハ都の外よ　山りせ　せあう　ふて　ふき　ふま　て　う

かれで　こそ　ふう

むそび　て　ハ下よ　ふも　いう

支木　月よこそ　ふせ　系の　ふれ　げ　ら　ど　の花　ふま　ら　れ

ハ月よこそ　ふせ　といひ　ふて　むそび　ふう

下つきて下ハ　の　りて　ふと　ふう

後古今　ちうよこそ　人の　ふう　ふう　ふを　ふよ　ふる　山さ　ふう　う

ハ　ち　ふこそ　人の　ふも　ふう　ふと　むそ　ぶこ　ふき

ぎも　ちう　むそび　ぶう　つう　ふハ　人の　ふま

ふう　ふを　ふハ　ひう　ふれ　ハを　ふま　ふう

ふて　ふを　ふと　ふて　下へ　つけ　れば　下よ　ふも

いふう　ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上こそうかるる時は　けらしハ　けれらしのこと
上そのや　穀は時は　けらしハ　けるらしは　こと
上　卯よりかるる時は　けらしハ　けりらしは　こと

こそ

十九二十孔格

こそ十九　まれびこそ石のはきまれる霜の宿　左中弁

是ハこそうかるうて新めの行末なるとるる下へ歌れと二字入て此とて歌を今まで学ぶてふの切るもの
くけ行を除る格の他白雲ハ例は出しられば是今宿

こそ十九　おくことそ風狂乱のうぐさら　宗因

是もこそを掛とるる下へ歌れと二字入て学十九の格之

こそ十九　夢のあけバこそ妻　了阿

是ハ谷の宮夢のあけバこそ妻と歌ること　歌ハ妻と
歌るる下へ歌れと二字入て学十九の格之

こそ十九　時雨こそ今宵小春孔雀月　作者不知

是もこそを用とるる下へ歌れと入てこそ十九の格

こそ二十　濃千年明石大神哉　其角

是もこそを大神哉と歌るる下へ歌れと三字入てわと
てふをを今宵学こそ二十の格之　歌ハ歌ん之

こそ歌る格

こそ二十　我まる敷もかくこそ古暦　葵太

是ハ下より上へ言こそみられこそる志ハもくこそと
歌るこそこそ歌るる下へ歌れと三字入て学之
くこれくハ二の句つよて歌るる下へ歌て一の句つ三の句つ
学之の句つよて歌るる歌しる句の中ろこそ歌れこそ志ハ
まくれ

こそ十九　一ッ家孔くるる人のなくけもふるこそ　扇月

是ハ詞の句つゞけ　てはこそ　こそと留りて下へ出れと二字入

古今　津の国なるハ　なとゝ山城乃　こそと留りて下へ同じく三字入て

なほ　あしたづの　ゆきを　雪の年　ハへめれども　雪のうへ　ハこそと留りて下へ　おれと二字入て

万葉　いまのをふ　是ハ　ゆきこそ　吹風　ハこそと留りて下へ　あふべき　是ハ

是ハ　ゆきこそ　留りて下へ　あるね　と三字入て　ゆきの

是ハ　ゆきこそ　留りて下へ　中の七文字の句つゞけ　こそ

をハつく　ゆきこそ　是ハ　人ゆゑ　このこそハ　廿二　のこと

ゆきハ　ゆきこそ　ゆきの　ハこそ　つく　ゆきこそ　ゆきの

我ハ　ゆきこそ　人目　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ

ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ

●こそ留りにて　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ

子五百十五

●花もみぢ　人やも　ぬ　是ハ　ヨシ　是ハ詞の句　の　これ　ハ　の　ざる　ゆく

と有　ゆきこそ　留りハ　ゆきこそ　と四字の　ゆきこそ

れバ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ

ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ　ゆきこそ

いひみてむまぶ格

いひみ　面ゆこそ待　乳の山　郭公

是ハ　面ゆこそ　まて　と　つ　ゆこそ　ある　待　乳の山　といひみて

ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

毎名尼

金葉　是ハ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

是ハ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

を　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

物語　鈴　佐津　を　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

是ハ　いひみて　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ

ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　ゆこそ　

外よりかゝる時のむまび詞

六 く

あく ひく こぐ せく きく かく ふく さく ゆく たく
やく そぐ うぐ のぐ さぐ あぐ いそぐ たく
あざむく　けまひのしたをる。とハいそれぬぐをらふけまひのぐハぞのや 髮ホも外よりかゝる時もむまび詞ハ同ド一ツ用ゐるなり

く

かくなむ あく あぐ さぐ つぐ
けまひのぐハをる。もいそれを外のそりた時ハ
あぐたむ むまび格く

上よりぞのや 髮ホそりた時ハ そる。あぐ。たむる。
むまび格く

六 さ

こさ やどさ ささ ちさ あさ ほどこさ あさを まさて
かさも ふさ ちさ
けまひのしたをる。とハいそれぬぐをらふけまひのぐハぞのや
髮外よりかゝる時もむまび詞ハ同ド一ツ用ゐるなり

さ

足さ よさ きさ ゆさ 髮ホ
けまひのぐハしたをる。もいそれを外のそりた時ハ
よさ きさ 足さ とむまび格く

上よりぞのや 髮ホそりた時ハ 足さる。よさる。きさる。
むまび格く

ど

ちど きど えど あど いそど せど あどの髮ホく
ちど きど えど いそど せど
ドハ里語ハ マイ とゝなべ ちど マイ きど マイ 足ど マイ く

上よりぞのや 髮ホそりた時ハ ちど。きど。えど。
むまび格く

六 つ

まつ ちつ ふつ こぐつ
けまひのしたをる。とハいそれぬぐをらふけまひのぐハぞのや
髮外よりかゝる時もむまび詞ハ同ド一ツ用ゐるなり

つ

足つ はつ まつ いづ 見つ ゆつ くつ
けまひのつハしたをる。もいそれを足つ はつ まつ とむまび格く

上よりそのやゝ髮ホそくる時ハそゝ[illegible]もむそぶ

ぬ

早ぬ　ちりぬ　ゝりぬ　ぬ　ぬ　

伊勢物語

くれなゐのふかき色にいでしもの衣のえだもたるまでふるさとの人目をもるよりけるの衣ハ袖のことなり

る（六）

るる　るるる　るる　るる　る

れのき　ちひき　あど　八きといそろ　泪八　八きとむ　ぶ　格こ

まー　八ゝれ　ま　こ　らー　八ゝん　ゝれ　ま　こ　けらー　八ゝけ　ゝ　ゝ　ゝ　の　ま　こ

外とハぞの八や　髪　ゝそ　おは　外　と　ゝふ　こ　と　ゝふ　ま　て

て　ふ　を　た　む　へ　ど　と　だ　で　泪　の　ま

見ハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　外　は　か　ゝ　り　と　ゝ　ふ　と　ん　は

○はは　ま　は　ま　そ　切　て　よ　む　べ　ー

外部

くまどつ　ぬ　ぶ　む　ん　ゆ　る　り　ま　き　九五

六く　百性む麦よとりつゝ菜摘唄　去来

見ハ　第　つ　ゝ　ゝ　ゝ　百　性　ぽ　麦　よ　と　り　つ　ぽ　と　切　ら

六く　秋いその月夜鳥ハ　鬼貫

見ハ　月　と　数　付　あ　れ　ど　も　ま　で　下　よ　む　文　字　あ　る　ハ　た　ど　泪　て

下　の　む　ま　び　ふ　ら　ま　ま　ど　ぶ　れ　ば　む　ま　り　か　り　て　く　ま　ち　ら

六く　有明乃ま　つ　ゝ　ぽ　ま　ま　つ　ゝ　ま　ま　ま　ま　中邦

見ハ　逆　様　つ　ま　の　ま　ち　つ　ゝ　ま　ま　と　切　ら

占今　外辺ちゝく家居しなれば　ゝ　ゝ　ま　ま　れ　ま　ま　る　声　ハ　あ　ま　れ　ゝ　ま　く

日　千も寄く佐保の川寄　ゝ　ま　ま　ま　ま

万葉
我君よりけハてふらしたまひしるつだまをくどいや夜よやを
けいやハいよ〳〵くりふこそ

ど　やぐて死ぬげしきもなんぞまで蛙声　さ乙女

ど　猫の恋ハ新敷のつよ脇をせぶり　楽飢

古今
君恋ふるハあしもやをぶくるうふひめ見ぬてハあるを

ど　九つゝも十日も志ゝどみれ業　五番　沾山

ど　みられきく九つも十日も志ゝどゝ切るり

ど　家なし仏ハつれど歩乃雪　とめ

千載
君ハ恋れを家ハあるゝ仏ハつれどゝ切るり
君ハ家ハをしらぬ道ハ迷ふとふ恋ん方ぞとおもふんぞ

ハ　はれもなくありぬるくの恋をきそひ出乃ゝみとゝもせてイ

つ　いとゝくんよいそれつ年計書　路通

君ハとゝ仕事ゝくくんよいそれつと切るり

つ　立出くて家あるめつ秋のくれ　沾徳

君ハ秋のくれゝちゝて我家あるめつと切るり君ハ訪ふ
かりゝゝり君も外のゝゝゝゝふゝ

つ　君ひ森の尾ハ蛇もつ猫乃恋　蕉夫

君ハ猫の恋ひ森の尾ハへびもつと切るり蛇もつ
つハへびもそとゝゝつるゝ八つ乃つぶりハ出ゝ

つ　孤ふゝれつ樓ハれ下のおこ〜米　木阿

君ハ元のもれ下のおこ〜米ぬぱうれつと切るり

注機
花見ゝゝ出ゝものを秋の神れ者ひるものひてけふをゝゝ
光秋俳業
ゝれ歌の月ゝ重ゝ紙ゝゝ尾ふゝの時ゝ人おもゝげゝゝ
古今
我ゝふゝくゝめゝゝつゝさゝゝゝゝゝゝゝゝをゝ拾山ゝてゝ月をゝて

是ハさゝ〳〵あや姉山よりて月をこそ我人
あぐらあるつゝと切らり

早ぬ　秋風乃ふくごとぬ縄まぐれ　嵐雪

是ハ縄まぐれ秋風のこゝろ〻ごとぬと切らり　けり八方紫
四〻

あさつゆと我衣をぬれバヒガ石のまぐれごゝ〻秋風乃ふく
ゝれ〻れ下の白ゝ似ゝらり

早ぬ　ゝゝ脱て落よ初ひぬ衣ごゝく　其角

是ハ更衣一ツ脱てゝゝ〻ゝ初ひぬと切ゝり

早ぬ　ゝゝゝて山ゝ月ゝ小なりぬ月の面　尚白

是ハ月の面ゝゝゝて今ゝ月になりぬと切ゝり

早ぬ　年ゝ月ぬ笑ゝ花ゝゝゝ　其角

是ハ笑きて花ゝゝゝゝきゝ年ゝ月ぬと切ゝり

早ぬ　内裏ゝも籠居て入ぬ菖ゝり　樗叟

是ハあやめ葺ゝゝゝ入ぬと切ゝり

早ぬ　石合のゝ折れぬ生ゝゝつぶきぬ　其角

是ハ不ぬ生ゝゝゝつぶきて例のゝゝを早ぬ生ゝと切ゝり

早ぬ　郭公今やいまゝゝ歩をこのゝぬ　壽伯

是ハ今ゝゝゝゝ

彩古今 谷川の流れ〜清く澄みめれば くまなき月乃影もうつりぬ

古今 秋たちぬ[廿二]と聞くより初雁を たちくる[テ]音れ指よりけりく 篠[廿三]嶋ぬ

同 まの秋よ[廿四]の葉つまんとこしのをちうふ紅ふ乃ハまぐひぬ

六 ふ むり〜匂ふ紅葉〜(マデモ)実さ〜(マデモ)孫皮さ〜(マデガ) 其角

是ハ紅葉〜実さ〜ハちんひさ〜むり〜あまぷと切るり はさ〜と

りつ何を[illegible]ふのさ〜そふべうぐ[illegible]さ〜の里借ハ マデモ マデガ

モマダ とんるべ〜ぶ〜よの里借ハ ナリトモ デモ あり

六 ふ さ〜ふ〜ふるる〜を思ふ年の暮 除風

是ハ年のくれさま〜のるを〜をおもふ〜と切るり

ふ 春もや〜けし〜きさ〜のふ月と梅 [illegible]

是ハ月〜梅さもやけ〜きさ〜のぷ〜切るりぷハ梅さ

六 ふ け〜畑よ蜻蛉のくるくバ花もそぶ 彦丸

全紫 くるりかき豊のかるりふあふ〜ある朝日のさ〜ふ〜むるりさ〜そぶ

候千我 今まる〜もさまるの月も実りそふ秋の伊山をおりひそれ

六 む 人よ仏〜猿もをもむ秋風 弥頑

是ハ秋の風人よ仏〜さるをもむ〜と切るり

六 む 榎の葉井よ人まるが月ハ毛 楽飢

六 む 洗濯のきぬをみこむ柿の実 為芝

是ハ柿の花せんぐ〜ぶきぬ〜ぶ〜ぶ〜と切るり

なよ〜せんさ〜や〜あれぐも写茶の方よハせんさ〜の〜

ありて〜ぶ〜洗濯ふ〜ふ〜ぶ〜むるやあるぐ〜もるねハ

のうををらぶ

伊多賀 ゆ〜りおりかきもでの田もハ 我行里よ声〜たくれハ

是ハ紅葉〜もでの田もハ牧〜のむ我行里よ声〜たくれハ

もでの田もハ紅葉〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ

千我 さ〜波や国はる〜秋のくさびてふるき都ふ月ふ〜ふ〜ふ

六 むん

はハかきうづ〻いちさえハ男なるんのきうづさ　一井

六 むん

をゝみ〻日ハ入まるん久さゝら　鱗甲

六 むん

ゑゝり藤もよき宿とらん初子日　玄来

六 むん

はも初子ひゝりねもよをあるゝんゝ切り

六 むん

市人よいづ〻是ゝんを玉笠　玉笠

六 むん

はも言の名ゝ市人よいで是ゝんゝ切り

六 むん

浴紫すき家叶蓮風結るゝゝん　ふ堂

六 むん

元朝の見る物よせん富士乃山　宗臨

六 むん

はハえ新乃こゝ子の山ゝるものふせんゝ切り是ゝの

の文字ゝんをつゝべ〻富士の山とゝ〻ゝるの文字く

六 むん

宿りせん藥の清えまなる日之　大安紙

はハ藥のつえまなる日之ゝりせんゝ切り是ゝ冬

ゝりゝりゝりゝれらえも冬のゝりゝゝるん

六 むん

福金をまて出ゝんゝ川　鯉　大安紙

はも初鯉ゝまてゝゝを生ていでけんゝ切り

いせ物ゝ青ゝてゝゝ冬ゝ冬ゝゝ行器の行ゝゝの系たゝゝみぢゝめゝん

彩吉今　あれゝまてゝ風もさゝてゝあ苦の系ゝゝれハゝくゝゝもゝゝハゝりけん

古今　秋　青ハえ新ゝ系ゝゝちえ山乃拔の系ゝゝえゝゝ系ゝゝ

彩吉今　ゝゝゝれゝてえてゝみゝえゝゝゝ八ゝをえゝもけゝも思ハゝゝゝん

古今　山ゝまえゝ人ゝまえゝあぬゝゝて系ゝゝゝゝゝゝゝゝえゝゝゝゝゝん

六 むん

神よぐらん田螺ゝあゝの陽を系ゝ　大安紙

はハ田系ゝれゝあゝの系ゝを系ゝ神ゝえゝらんゝ切り叶式ハ

廿二 のゝえゝえて次の白ハゝゝるゝえゝ

古今

秋の神ゝ尾系ゝまゝゝり咲系の系ゝやゝひんゝあゝゝをゝゝ

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

又[illegible]

[illegible]

つぎ[illegible]

[illegible]

[illegible]

る　山里も見まほしき人　都人

是ハ都人山さとも見まほしと切りけるとて用ハる
もいそぐ用あれども部のうりれ時ハ可といそぐ用をも
あぐる　みぐるとも　むとふ格あるもの

竜田川　百人一首　錦とるハ　れしくてさびぐる木の紫ちるハをしまる
るもをしまるとふる用あれども部のうり
あれバ　まるとむとひて切りるハつゆハ
つゆ格　れども
上より　ぞの門　鞍おきかるハ　るといとる
須ハ　るとむとぶ格あるあと

古今　月見ハ　ぬ人　まるかきくり雨も　ふるんとびつるも秋ん
是ハ月　ハ　ぬ人　まるるとつるるを
部のうり　れバこぬ人　まるとつるるあぐ
らて　まるる　あがるる　ぬる　ぬる
と格を　
古今　経信　みちくるしちる長たゆ　ふらづあきるる

切掛　ぶるとも　れ光りハ　ふまぐみよりの山ハゆきふる
けごとく部より　るとむとぶハつゆ　切
る格のる　字乃訓よ切る格のるを持る
字あり

り　益荒よ　宋橋　緑むあるれあり　大中臣
是ハ休むとい　とうかりるる是を部のうりとい
り　せとしなき　風ハ　復まり　化粧活　大中臣　嵐雪
是ハつくりくしセハ　あきまハ　せまるりと切る
り　浴梅乃　ぶふ秋を　おくりる　大中臣三代　吏登
り　ふもし　夫を　ふれど風　夜の雪　大中臣　蔡太
是ハ夜の雪　夫をふれバ風あり　と切る
り　ふる梅て　雪ふる　角田川　大中臣　完来
是ハ雪の　ふりまて　雪ふる　と切る

り　よもすがらのどを笑ひ山ほとゝぎす　乙由

是は山ほとゝぎすのきりのをとゝひやうしとかけり

り　人もとへ人も留まるなり秋の雲　秋村

是は秋の雲人もとへとんもとまるとかけり

り　うるうるり酒の肴ふ這せけり　其角

り　朝顔の垣ぬむ側のうら蒼げり　木阿

り　屋のべ社木槿は馬ふくれり　也哉

り　宍達うる青蘋の鮒を拾ひう　其角

り　松ちりて常に新日と成ふけり　不角

り　くる年はくくくれよけり　麦川

り　初ちれ猿も小蓑をほしげなり　也哉

り　折れぬちりわれば散うけしれぬ　鬼房

是はけしれぬれたれバちりわれバちりうとかけり

り　大雪数氷のくをふぐる兎　和之

り　ふ苗ふて命はきく花せり　宗因

り　むの声すゞ紀貫はおりけり　了阿

り　先ふむむ椎はもてり笑ふ　也哉

是は夏木立先ふむむひのもあり。とかけり

り　大和路はふ春も芝ふう　大庫ウ月

り　風ふて八ありけり海は音　言水

是は海はれきあり。とかけり

り　ゆれあるまへ　みてり　ほの月　夜皃

是ハ春の月中れあるまへ　水ほ　ハ　てり　と　かり

り　松の月　枝ふ　ゆ　ら　ゆ　ら　来山

ゆ　ら　ゆ　ハ　切　り　格　二　つ　ら　さ　ま　り　ら　是　ハ　下　の　り　ま　て　切　る　ん

り　入相　ハ　ま　ら　て　ほ　ま　り　月　雨　治豆

是ハ　六　月　あ　入　あ　い　ら　れ　て　の　ち　ら　と　か　ら　り

り　風　ま　で　ハ　二　階　よ　ま　ま　り　郭公　桃隣

是　ハ　ほ　ら　ま　ま　ま　で　ハ　二　ら　い　よ　ま　ら　り　と　か　ら　り

り　夕　凉　の　毛　よ　ぶ　ま　り　ハ　ま　ら　り　け　り　乙由

り　亀　ら　ま　ら　ん　て　白　菓　ら　ま　ら　り　別条

り　島　ま　ら　つ　め　ら　れ　て　ま　ま　り　朝　さ　ら　文末

是　あ　さ　ら　ら　ま　ら　め　ら　れ　て　ま　ら　り　と　か　ら　り

古今　みち人ハ花のおろもぶなりぬあり　苔の枝よかるまきだすりせよ

今撰　苗代の水ハ稲あるよりまるせ　民やまをげある君が時代この手

古今　ふるさとなりあ一春見れば都も色ハそらぬ花ハされ多

新古今　初雪のふるれ年枝ぶられて志めゆふ迄ハ冬ごろ

拾遺　いもの海れ波乃ろけあるさ陸あれどふきんハ底ふちづめり

秋雪　弁天月ちぐれ一めゆ一葛の系れ一こぶる秋よ庵もあるり

古今　あぶ春りと名ようそたてれ桜ゑとふれあるくも侍多

日　春日野ハ久ふ春ふ焼そ春るれ片ちもこもれり我もこもれり

河花　古今ハ春めきふ久り三よ　みちきが系とをまみちあり

風雅　音ま秋ゆきけばひあ一郎ゑちくくちをとふんあり

ちちき　山彦ハ　ふよ　ゆ　ち　き　ま　れ　花　有風

是ハ　ふ　ま　れ　ま　山　ぶ　ら　れ　ハ　ま　ま　ゆ　ち　き　と　か　ら

ちちき　花の　ち　ら　塔　俄　ま　る　人　れ　紙　ぶ　ら　き　秋村

[illegible]

糸薄をぜふせぐさを中のせてき　嚴阿

●[illegible]ぎるハ

●部[illegible]れて[illegible]を[illegible]明と森光ふ

是ハ引き[illegible]ふべきを[illegible]の[illegible]ハ上[illegible]すりくる時ハ[illegible]

のえび[illegible]のくりを[illegible]の[illegible]て留る例ふ

けるをみぎとる[illegible]の[illegible]ハ上[illegible]すりくる時ハ[illegible]

き上より[illegible]や[illegible]ふて[illegible]

拾撰

みぬ人の[illegible]ハ[illegible]き[illegible]花[illegible]ねを[illegible]人の[illegible]

是ハ[illegible]ハ[illegible]花[illegible]ねを[illegible]人の[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

万葉

[illegible]ふ[illegible]人を[illegible]ぬ[illegible]れ[illegible]

古今

かき[illegible]ん[illegible]ふ[illegible]き[illegible]

拾撰

風[illegible]も何[illegible]ん搦[illegible]白[illegible]き

けるをのぎハ[illegible]ハ[illegible]

一字[illegible]時[illegible]き[illegible]

[illegible]ハ[illegible]元孫の[illegible]ハ[illegible]

[illegible]をのぎて[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

拾成鮫を[illegible]ふ[illegible]時宗ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

現在

[illegible]ハ秋の風[illegible]ハ唐さむ[illegible]

現在

我[illegible]ハ[illegible]　女郎花　[illegible]太

是ハ[illegible]

現在

[illegible]　白猛

現在

大原宗[illegible]　暁山

是ハ[illegible]

現在

秋[illegible]竹の[illegible]　山田南街

見ハ竹のもれあふまさるだう秋さびしと切り

現五〜 もれ葉市ゴがしきほど狩さび　紹考

現五〜 花寒し清水山ゆる夕月夜　雨竹

見ハ寒ゝゞ山ゆる夕月夜花寒しと切り

現五〜 行事を墨ゆゞ深く鶴もなし　也有

現五〜 月光のあるもさゝ門の松　玄来

見ハ門の松月光のためぶさしと切り

現五〜 鹿栗も笑ふもさびし秋の山　李由

見ハ秋の山いが栗のさゝふぶ鹿しと切り

現五〜 くれあるもかくてはさびし鳶凧　蓼太

見ハくゝれ凧のもらてはさびしと切り

現五〜 帳もれ孫ゞひはやもし残る面　支考

見ハ誘ふるゝびらの孫ひハ安しと切り

現五〜 山里ハ茅屋歳を逆　梅花

見ハ梅ハ花山さゝぶ万歳逆しと切り　去来

現五〜 三尺藤て残夏月遠し　月

これハ茅の煙ゝ尺藤て残夏月遠しと切り

此句ハ旅宿ハ夏狩おし馬上ハ祝ふてゆく

乃もをゞ紀ハ姉ゞ ハ紫形ゝゞる茅の

煙ハ代ゝ秋ゝ有明の新ゝすゝハ月も遠くゝ

しゝふさと 劉駕が詩ハ 上馬續殘夢といふあり

王禹偁が詩おも 赴朝雞呼起殘夢馬駄行

ゝもありこれゝふよれゝと知もする

新古今 たれハと思ひたてもまつよ老てゝ風ハゝめ

古今 萬葉つ多きれる上とゝ つゝり老よゝゝ ハ茅きゝぢ

ゝ 世事ハ茅指ゝす友根　関夕

是ハ夜大根よの中ハ茶つゝあゝゝと切らう

ま　十月ハ夜を寒も思ふ　有奴

ら　箱根こえ人もあるらしと鈴の音　素堂

是ハけされをもるねこえ人もあるらしと切らう

ら　麦をとられ花もおがまぬ一番ら　素堂

けら　月雪とのさぶりけらし年ぬ者　素堂

是ハゝゝれ月雪とのさぶりけらしと切らう

かゝる時のけらゝハけらゝれこそ

けら　そのゝみハ谷路ありけらし小秋雑　素堂

是ハ小夜雑ゝゝハ谷路ありけらしと切らう

古今　花のごと世のつゝあゝバるてしむらゝ来ぬらし

同　世中ハ更て桜のなりセバなのゝけゝまし

同　立田川ゝ紅葉を流る外なびれこもむろの山ゝ時雨ふるらし

紅葉ゝゝ流るゝ人の衣ゝてふあまれ香久山

是ハ白妙乃衣ゝてふ天の香久山　紅葉ゝゝ

来るゝけらし　紅葉ゝゝ

と詠りゝゝもあるゝゝ

外　十八十九二十の格

外二十　景清も花の座ハ七を清

是ハ句ゝりかゝりをれバ外のゝりく七を清と詠りゝ

下へ句ゝんと三字入て字ゝゝて二十の格ゝ

外十九　送られつ送りつゝて水ゝれ秋

是ハ送られつ送りつゝと切る格をゝゝれも打下へつゝきて

秋と詠りなる下へ三字あるゝゝれゝハ秋時のおひ小ゝら

ゝバ日をゝゝゝて年月を送ゝれ名残りゝこの別れ

数多のんを伴くゝ年月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りあれバゝゝと二字入て字十九の格ゝ

外十九　七草は又くり返し同じ事　扶風

是は草と為りくるる下へいぶと二字入てふをはぶき
全て廿八字にて十九の格

外十九　雪の為めど近付もおなじる　世彼

是も雪と為りくるる下へ彼のくりかへれば彼りと二字入
てりとてふをぬき全て廿八字にて去の格

外十九　いづくかたられぬ萩の露　若良

是はいづくと数の月をあぱと定る格にてもちびて切るる
をとゝる交て下へつづけくり付るもはゝそもの畧言に付
白は曾良病にて此句は列る時あれば「いづくかたられ
ぬ萩の露」といまこゝ世あされを
露と為りくるる下へよりと二字入て此句を全て
廿九字にて十九の格

外十九　本当に煙もちぐ歩くめる後の月　左平

是は月と為りくるる下へ月と二字入て廿八字にて十九の格

外十九　雑水の名ところなくば冬草　其角

是は草と為りくるる下へあぱと二字入てりと合てきく十九格

外十八　よりて山又十くるる所ちなる迫　々来

是は迫と為りくるる下へ所のくりかへれば迫と一字入て廿八字
にて十八の格にそのやう数ホの時は別にと入る格にあるあ
あり

外十九　かつる蕎麦根はくるるして藤九郎　吐月

是は蕎と為りくるる下へさぱと二字入て廿八字にて十九の格

外十九　夕暮をこゝろえくて初時雨　柳几

是は雨と為りくるる下へふると二字入て廿八字にて十九の格

外十九　背戸の畑茅ぬる芋だみて蕎　且豪

是は蕎と為りくるる下へふぱと二字入て廿八字にて十九の格

外二十　夏月故を庭すて名石西　其角

是は名石と為りくるる下へ名ぱと三字入て廿八字にて二十の格

外二十 いざゝバ。ちるゝんふ。ちるぶ。ゆ。近。 たせ武

是ハ近と為りゝるゝ下へ加んと三字入て字ゝ也、二十の格ゝ

外十九 情きて。おぐゝふる人。冬乃蠅。 其角

是ハぐゝふりかゝりれバ邪のうゝく蠅と為りゝる下へ

あり。と二字入て字ゝ也て十九の格ゝ

外十八 仙が食ゝ。そゝて。ゝて。携。特。 化老不知

是ハさゝゝ特と為りゝる下へ也と一字入て字ゝ也て十八の格ゝ

外十八 客人ゝ見。鮑。せて。くゝ。ゝり。喰。 禅桃

是も賓と為りゝる下へ也と一字入て字ゝ也て十八の格ゝ

外十九 眉掃。ゝ。おゝ。ゝ。ゝ。て。紅の花。 ゝ也武

是ハでよりゝりて花と為りゝる下へさぐと二字入てぐと

ゝ示をゝを含て字ゝ也て十九の格ゝ志ゝふけ白をゝひ

字バのゝもゝゝ十八の格ゝ志ゝ用て此下へ中と一字入て字

ゝゝゝゝゝれゝゝゝのゝゝく為へ句を一字入ゝゝ例あきゝゝ

俳諧秘記の中ゝ多者の説ゝ一字二字入て字ゝ也て なんの

切ゝもゝゝゝゝ者

● 眉掃を併ゝて や 紅の花

ゝゝゝゝゝ

彩古今

たてぶくろ　ぬんをぬぐこのうちれおくまぢ人のれらん　見もおろ同じけれ　けれ　ひい　ひを入てけ　ぬ　ぬ　ぬ

見もおろ同じけれ　けれ　ひい　ひを入てけ　ぬ　ぬ　ぬ

けれよりらんハいまおかーけ　ぬ六帖十八

たてぶくろあるぬんをぬぐこのみちれれくまて人の彩ぬ

とらふ　ぬ　ぬ　ぬ

是ハうぐひすのやこゝあり是ゆまぎれて新るべし

いひけ　むすぶ格

いひけ　墨よ袖あらひて墨ぞ川　宗養

是ハ墨ぞ袖あらひて墨ぞ川ともむすぶことあるを墨のこゝ

いひけ　又たぐひぶぐ川乃白鈴　ちゑ

是も又たぐひぶぐとむすぶことあるぐの川のこゝ

いひけ　くふより八見しゝ苑の夏衣　後世

是も苑の夏衣ともむすぶことあるを苑の夏衣と

いひけ　市中をのぐれて月八角田川　西柳

是もぐれて月ハ角田川ともむすぶことあるを角田川

いひけ　芳野山ちんゆハ逆あくら　同月

是も芳野山ちんゆハ逆ともむすぶことあるを逆

いひけ　朱ひよ高ぞ貸をあけ扇中　ちゑ

是ハ朱ひよ高ぞ貸をあけ扇中ともむすぶことあるを貸

朱ひよ高の貸やあけ扇中

朱ひよ高の貸をといひけるこゝ

ものをやとゝまぐさやあ一ぬやハ紙屋のやあるもあく

ぐらぐひのやまもあるべ切るやあれバ扇の

人ぬ白切字あ一たぐひて後ぞやをくゝ

おかるぬ切数ひ二の白ゝあるやまゝのそざるハ

いらく書ゝ是ハ紙屋のやハぐく組をも交てやと切

ゝを紙屋のゝをつきて切るゝいゝ歌くんを行べして

たゞやとのゝ一ば切るゝとゝふ世おのゞ自由よやを

あつふくをきつぶるこの科あるべし

いひみてむすびるるかハ　イミ今ハくみドト百

公家　ものぶれどうしもあぎたのたまゆ舟波のうけても今ハくるのまど

長ハくひもあり　しあぎたのようい

うけてむすびあぐ〳〵下〳〵つぎくるり

新古今　世中をそむきてハまりるれくきこそハあれ京のさと

長し　れくきこそハあるといふことあるとあなる京

のさと　いひうけてみてもむすびより第ひよりの

科やもといふやまれくる

後拾遺　いつとなくくんそくある我立やふれ立根よかるまこと

けやをあ〳〵くるてそこあるくるべし　見ハくさ

びの中をこゆる河ゆて　ものもむすびて下〳〵新くん

と三字入てゆ三これられやをりまり〳〵て新と

いつて下ハ長して　神長ハあれさるるよくる白雲

かとくる時ハくるし学びみまくるびの中あること

学べし

うあ行部

列とハぞや歌こそ新かとふこそあて

行りかるる所をも一つ分とつくんべし

の外

うあ　つく

遠山と杉りへばつ　宗祇

まつきよし杉を叩く住居ろ　玄来

知る人ハあるとしくと花ろ　玄来

昇ぬ安ようくことりくる菜版ろ　嵐雪

宝くくる三百月ろ　素堂

三日月ハ梅よおのきひづくる　不角

よれ中ハ三日月ぬろ　芭太

外
外
外
外
外
外
外
外

上ゝりぞやと髪こそ乱すゝと詠ずる例あり
ぞもやも髪もこそも　そもそもそもそ

外　燃る糸くず（ばゆる敷きる乱　木阿

外　梅柳さとる乱糸女一の郎　十世成

けゞ市和ま

●梅柳さぞる乱糸女郎

とゆり冨むの方ハさをとありて正一さぞとゆふ河ハ

推量のそくく上より推量の河ゆりくりてハ乱糸六為

らぎ　「推量」の河上るあてもそもまびおれバ下ハの

外のかゝりるくく乱糸もいるるく

る我　見もしゝ糸さぞ糸むりれちきりぞと思ふ物くゝ仕さまゝきく乱

見ハ二重よくくのるゝ糸けぞハ切るゝぞをぞと

交て下へつゞけさり上のさぞるのそハやぶとゆふ

逆へくりてかをハくらゞ物くくと交て下へつゞき

てゆめそをハあひやらぬハなれ世のちぎりぞとる糸

んをゆゞるゆめてもれば乱るゝきくくれくとゆるくく

右の歌自然さぞハを文字の上る重ねてもなれてきくくを

ごと尺ちゞくてさぞと字一ゝ繰りぶるくゆり

外　水底をとんて来る新の小野乱糸　丈曲

外　高燒筆見豆ハそのき柱の郎　子郎

外　金入くゝ冬をうゝつゞむ棒くの糸　曲窓

外　故帽つくゝんはくゝどと一筋二歩の乱　六窓

外　豆森しく手れ動きやむ園麻糸　板風

外　林さハ東京をとけくる巨燈ゝな　桃先

外　新影のちくゝぬんくそ女この郎　半細

外　西瓜刻くゝゆりゆくをくゝぬ朝乱　素堂

外　井のゆよおくゝ糸なる宇宙乱糸　東下

外　秋も弁そのまゝにあるれ　重五

是ハ引くと数行あれとも下よりも文字あるハたゞて行あれバ
ふと当りてもそこあひあーけこゝハ鏡の裏もいて

の　仁の〻赤く梅しゞ菓れ白きうか　巴丈

是も鏡の裏よりいるごゝく数字のてよゞ文字あるも行
ある中ゝ下よりふくもいちゝく

仁於き　いつよりもくすりなき表の月あれバそくさゝよりうぐきうれ

是ハあるぞ〻〻て鏡行のてよりも文字よゞ文字を八ちゞ
行あれバぞこゝや数外ふ　あゞふ重りても
さゝゝぬ行ありとそゝゝ

の　いく年の白髪も秤乃光うか　玄来

これゝもあよ同ゝ是ハ番あー番白の俗白ゝもゝぞゝ
又鏡の裏外鏡の下よりどとゝる行の俗白ゝも先ゝ又歌白
の白法の俗白のふゝもゝぞゝる

外　菜弟義よりも寒き大和河内うか　蓼太

外　草枯て隣よりうき野寺うか　麦阿

の　卯のふをかぞ〻れ関のうれ若うれ　若良

叶白ハ行田桂〻大夫ゲ白河の関をとひとそゝうとゝる

外　梅折て賀ふ近つく白ひうか　盤舟

外　鴨山月を近ゝ千鳥うれ　双鯉

外　棹市千日の隈〻をそゝみうか　文母

外　大津絵ふ丹のうゝうる暑さうれ　蓼太

外　雲北茅石間を抜て取りうか　李由

の　あよんつうぬよ市ふ苔生う影　忠知

叶あるはうぐひの汐あび　鮫のえもたぐひあるのんぴつ
ぬるとつるをえあれば他をとる鮫の付くされば下ヨクふる
いそうそう

風雅　人されぬ月ありつんハとも　雨遠
是も有。るのうひぴあくとりふこうれいうぐひの
きうもあるぐれば下よりふるもいそうそう

外　風やたるちる松ぬ二ふる　宗祇
是ハうぐひのやをちるとむすび　沼そもびられば下よ
うふるもいそうそう

外　関屋や松ふるやむらんふ夕〳〵ふる　雨遠
叶二ツのやハ新のやそてをそのはまハあづうぞうぐ
るをくうろケうるやく是ハやかヤ　ぬやとうくひうんと
つも木のをうそて実のあるうのくそ　ひうんとうくんそ
栗や松ふ書　伊のやうやひうんふりつぐふとうふれだ
うるもさうぬ新のやう

の　世をふるもさらに宗祇のやどりふる　宗祇
叶白雪ふ多ふ多ふ白の雪ふもうぐむり

の　是ハ冊ふるハうーき　あと松木の家ふやたくも五ふ村時雨
ふれとうふをとれり叶ふるをとりて

の　世ふふるもさらに宗祇のやどりふる　宗祇
叶白雪ふ多ふ多ふ白の雪ふもうぐむり

の　芋ふ志の紙ふれ　蕉太
叶　今朝秋と志ぐ門掃男ふ　存義
外　刻ふ多ふ物ふきぐ事ふ多ふ　雅ふ
外　ふふちり月ふ月ふつるをどりふれ　芋里
手の　雪や月梅ふ花の光りの那　拾栗
是もあるふ月ぐ
下ハ多ふんと三ふ多ふてふをふ成ふれバ下ハの那ふ

かりそめ乱もつくしも為ること

手義 花や爰いづれの限たそかれ

花も名所とて動め言のそへ「あらん」と三字入て少格へ

づもて動め言のそへ

や

句法

花ハよつよあぐむるやを主て下ハの分ばかりもて名といふ必

二季の時のごとく又季まうそろ物のもとの名

ようそろるものとハ

國郡 名所 旧称 故人之名 神 仏 月 日 年々

あぐむと季のようそろるとハ上のやをおくでハ叶ハぬといふハあ

らべ あぐむるやハてよをその格よあづかる故ちの句のもの一つま

ゆるるもんされバ二季ある句よやのあきもの下を乱といふぬ

も句ばかりあぐむるやハそ句のもよりてのもざりありとんべし

例 新鶴や 扇のかなと 地獄のかな 其角

花ハあさがほハ秋 扇ハ夏

例 反潜や 花ハその秋を嵐うか 嵐蘭

花ハ故人の名を季のようそろるとハ

の 大磯や 砂の光り 暑さられ 陳曲

花ハ大磯と地名を季のようそろるとハ

例 伊吾や 田植ま 仙さる 汐干かな 俳諧新

花も名所を季のようそろるとハ

の 夕鶴や 秋ハいろ〳〵 ふべかな 其角

花も夕鶴ハ夜「ふべ秋」ハ句ハ六字「みどりある」

つ季とも季ハ月ハ「秋ハいろ〳〵」花ものあり名といふ

とれるる 同 「かな」といふ俳諧の季句のもあること

あて 句ハ あぐむる 花 うぐひの や で こそ 数句 社 ものて

初の や と 末をうそ 金の下ハ かな もつ ものとも

うぐひのこと話 う

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の里洲ふ アンタラヨカロ ヨカロ とんねべ

[illegible]

又むが[illegible]が [illegible]ぶあ [illegible]ぶあ よりや多白まハ

[illegible]れば[illegible]も異[illegible]

てあ部

て

てよ衆情をかくさせるハ

行春坂麦ハ穂よりもあきらく

[illegible]

[illegible]ハ衆情をかへ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て

でよりかりふつハ

[illegible]ハ上よ数ひてもひろるで[illegible]て切るふあれバでよ通ふ

つもりかりふて苅萱もこぶれてあるを拾く

でよ切るもも

古今

山さふハ秋ふてふふびしーふれ麻のなく稀よ月をさ待ーつて

でよりかりふつハ

[illegible]ふあるを以てそをあぢをひて下ろう上へ

[illegible]て「麻のあく」多よ目をさ待ーつて山

里ハ秋ふて[illegible]れと切るこもも

[illegible]ひでもりふつ「あぐるよりふつハ

く白のゆ[illegible]よくものと

て

あぐ[illegible]

あぐ[illegible]の

[illegible]ふ

[illegible]ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よ　冬牡丹　上　手鞠　下　雪　中　郭公

是ハ冬ぼたんの花ぼたんハ春のよ。と切らり句なと
ある人冬ぼたんあるよ海ハと詞を添てゆゑこと
いれどそれも夏牡丹の花時をもれあけど冬牡丹の
花時をこいつべきあハ千年をよ。いふこと

古今　萩の葉ゆ玉ぬけんとそれば花ぬけぬよ。ん人ハえぶあ。ゝ見ぶ

ひ　ふちゝむぼけ　ふもぶ　ゝき　秋の雪　大江氏

是ハ春ふちゝ秋のれこちゝむぼけと春ふ初ふ切ら
ゆ初ふも下ハ冬のつきて下ふ切ら冬ふあるも是
かれなり

是ハ中ゝ三ゆ。ふ初ふ切りのふ冬ん雪九め
是ハ下ふ冬ふ冬ふて是ハ中ゝ冬ぼ雪あめと切ふ
むふ冬ん冬と切ふ冬ん是ハ冬ふ冬ふ冬ふ冬ん

ふ　肩衣ハ　肩衣ハ庵ふ冬ふゆゑ冬老の袋　秋風
是ハ老の袋ふ冬ふゆゑ冬と切ふ

ぬ　宮人よ　宮人よ　ぬ　ぬ　ぬ

元　紀貫之切臣切臣切臣

[illegible]

二日よもぬるりハせどぶろの春　[illegible]

古今

[illegible]

[illegible]の句

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●こゝにたちぞるる事有

●初さて〳〵花をもち〳〵そ村花

行の五法乃分注ハ六帖ひがせこがふりさけん
つゝあげ〳〵らんまゝ紀有あるを稱行そ　是ハ
あを畢てゝのそい畧る例あれども上のあを畢ることハ
例もこゝにとりをゝ〳〵けなハ万葉まなりて諸有
黐ナビキ莫形名引とゝるを要る得りこもゝて六帖の
ゝち万葉の有をとゝるハえもいゝあひがとなる
ゝきそう〳〵とゝ有

花ぶち〳〵そといひぐき雪を花をこゝいるゝ〳〵のゝそ
柳ゝ泥ぶ柳ゝそむ〳〵の慧　土佐紙
是ハ山〳〵慧柳ゝ泥ぶ柳ゝそとゝ切ゝり
第ゝ柳ゝ第ゝ柳ゝ蓬ぶ柳ゝそ里慧　其八用

是も里つゝめ蓬のゝゝ蓬ぶ〳〵そとゝ切ゝり
牧ぶ〳〵め分ゝれ巳ひそ玉祭　土佐紙
是も玉まつり牧ぶ〳〵め分ゝれぶ巳ひそとゝ切ゝり
萩ぶ刈ゝそ西ゝ刈まゝて〳〵ゝ男　其八用
是ハ西ゝ刈ゝ萩ゝ刈ゝ男ぶ秋ぶりそとゝ切ゝり

新古今
ゝ〳〵ゝ〳〵ハいきゝ松ぶまゝ松ぶまゝ
夫木
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

余情を下ふくませる例

（そのを）為

青くてもなるべきことのを長くし　古今

是ハ長くまくてもあるべきことのと余情をふくませて為なり

（そのをれをこのを）為

風を待るひさごもなるを秋和　嵩雪

是ハまちくるき風をまつるひさごもをもとと為なり

所古今　是ハ物ゝ伝ぞ人のとひし時ものこそ思へきこえしものを

いせ物語　是も余情をふくめてよめるものをと為なり

つひふり雨とハくもて世ーらどきのふくとハおもてさりしを

所古今　是ハこのものをもをもてをまをもて為なり

ひとりねとあるもるよりハをこれへ〜ゑ行あるを極て是まを

（ホて）為

幸湾ひ松ハ花よりおぼろ　古今

是ハ下ゝ余情をふくめて山てと為なり山ゝ月を見

物ゝ　名のをもをもて引てとよめれどけ白のそどあハ勝る系

ゝるをを花ハ余情ふかくふるをもをもてとなせり

いひまれるを引ふかくふるをもてとやうべくれど引ふと

引て人異く引てハ引てのつぎりくる物と見ゆ今

例あれバ引てとよ余情をふくめて為なり

月清集　花もまぶ咲ぬるくるハ山川のうちいづる波をまをもをもて

是もちまををふくまをもてと為なり又

○ふしてと為りくるハ

古今　月やゆくぬまをもをもしれまをあ神ひくハりの所をもて

是ハ引てと為りてよる余情をふくまをへ

○してと為りくるハ

万葉 いつせ川法土のなかれなかるゝとゐひて
是も下まよる事情をふくめるなり又
○ゆくゝまと詠りゝるハ
古今 みちもなくなれる事のすまぢもりゝれゆるみぶれんと思ふ我ぬ
是ハ歌くまと事情をふくめて詠りゝる
○まゝくバと詠りゝるハ是ハ文字ある共
ゆるまても一百云葉を入て詠ることゝるの所の義乃数と思ふ
松葉 いるぶゝくまるる月日をとゝもの所の義乃数と思ふ
是ハ歌ゝと詠りゝるハ
一百入て詠ることゝ
詠りゝハつぶめ何 まゝくバとハ別く是ハ
却来形何の数のまゝの所のまゝくバ
詠ることゝ
○セバと詠りゝるハ
千載 はぐることゝ稀ぶめれ家よりこゝ詠りゝるハ

是ハ歌ゝと詠りゝるハ
海て詠ることゝ叶句をふくめて事情ある詠りハ
ふも 詠ふ 引ふ あぶゝ詠れるあり是をあ
くんめて 詠ふ あぶゝ一字を詠りゝると思ふ
ハ句ゝことゝ 引ふ ふのを あをのこれ
を 詠て 詠て 詠くる 詠てまゝくバ せゝ
と詠りゝる例と ん詠べゝけんれたゝひとえ
元祖の歌白ふ
●新古今 ゝ詠りゝ神も出るゝ
とつゝ行り叶句の所ハあゝもゝ詠れバ切れ
たゝぶと詠りゝ叶例 撰集ハ古今拾遺集ハ
かきくめのこたる田乃山のまつゝ又くるゝもあゝぬこゝろは
是も ふと詠りゝるゝ詠れども是ハ八ひゝみ
ゝてとゝの詠る格ゝ 下より上へとゝて又くる
人もあゝるゝ詠ふあき点のこと五田の山のまつゝ
と詠るこゝ詠ゝつゝハ青葉ゝ是ハ詠るゝ

のそんゆくさまをくわしくして事情をふくめて詠るも和歌の例を以てまづ自然おのづからふいひ出はべるべし
されハ素堂ハ京の例を以てペと詠る変白あり是ハ
十九の格ふ因しるべ

蓮の実よりとても蔓延ぶらん　素堂

是ハペと詠りしるるとべと二字は重情と　これらハ
変白ふも所ふもいしるべきなり

雑因法師の去々集より

任せて〜京よりのぐる時変撰の社にて
五〜七ハ〜〜〜ハ梅乃花のこゝろ
是ハよりて〜きと詠る格あれども〜ハ梅乃へつぐ
きて〜〜ハ梅乃花のこゝろと詠るこゝ是ふ
も同じとふ二字は重情
古今
今ハ〜ふ〜ふへき人ふあり〜〜ハ〜〜〜して門させりけ
ハ〜ハ　とゝ〜ふとゝ和して切〜をみて別なりけ
でハとゝいの反乃ち拙でふ〜〜〜〜〜

正親白　白法

四月中の酉日加茂の社奉納

祭ふた冠にらくやあふひ草　了阿
ま　ゆ　や　あ　さ

是ハ通類を六字白の氏と白つゆ上へ亜を正親白と
いふこゝれもとより上へうちえして
あふひをさゝつりふハうりふらくや
と切るやみて切〜り式格ハ神祇を綴　又ハ祝言
賀ふふ

ま	ゆ	や
		あ
		さ

けごとく　ア加サ　タナハマヤラワ　此十字のオ　ふて
六字白のこゝらと白つゆ上へ　五十字額の横
十字は中いづれの辰ふても六字くづるを正
親白といふ

親句

句法

代〇下の形へ五十顔横十字の中 ま〻も竪五字の中
ま〻も三字句 所へ ま〻を親句とゝふ

(の) 神ゝ宮や 葉椎の花咲 (ぬ) ぬさ ふせん　拾栗

是ハ竪五字十二句 子ノ みゝちを三字句のうらへ
むきひたり

(い) いく年ゝ句 (り) 殺も神のひろりかゝ　玄蕃 (し)

是ハ横十字 イキ 二 千 二 ヒ イリ井 の中を三字句の
うらへむきびゝり句法ハけことくちがひども神道を納
祝言賀ホ ふせひ親句ホ せよといふハあゝ跡句て

親句ハまゝられりと又ハ常ハ句作りまゝ〻ゝ
又ハ長句を長ゝ一長句ハ作句ホもいゝせり

〇ある人婚礼の祝の長句ホ切字ホ入ず口伝ゝとゝ
まべてまゝの通る形を切字ゝゝ入ばいひやゝも有まじゝと
思ふたゝくバまく婚礼の祝義をいそんは出婚礼もそ
是能出ゝ手伊万嵐出めでゝゝ御ざりまゝ。とゝふ時ハ
所のうりまゝ。ゝ切れバ切字を不入ハいゝやゝとゝふべき
で是ホのゝゝハあゝりふあゝまゝ一きこと有うゝ

五十字韻

上ハ五字を 父字とゝひ下ハ五字を 母字とゝふ 父母
形今ゝ字字字として反字ゝゝ
父字ハ竪五字ハ関を上ゝ下ゝへ部くのゝ出て横ゝゝごゝ
母字ハ横十字ハ句を左右へのみ部まて竪ゝゝごゝも

たとへば けり をよむるよげハ上ちれば文字ハ下あれば
母字よて父字よげを母字あれり 此ある二段へあゞれば
母字繼ぎ父字より 合ぎく先を反字とされば げ
りハ五字あれば五字のきとつゞく三字反とつよハ三字あるを
ゞ字略之たとへばぐらぐらむ此字を二字反ヨされハぐら
ぐ反字 ぐしけらとむとをゝせバぐと一字ヨつゞまるく
されバ

骨掃をおもゞ下て紅の花

花ハ上ちるもいつるごとく十九の格ヨて花と学りとるを（さく
と二字へて字ヨあるゞ此白字ヨてハさくと係るぐは
くらん 此字のぐく又

つるべき根ハよりてふして蓮の花

花も同じ十九の格あゞ此白字ハたゞさくとのこりあるを
手白字よりて差別あるとゝをんゞ

○竪六字のうちよ父字ヨ
母字よりあるハ母字成
反字あるとゞ母字初くヨ
あるべしく

○横十字の中ヨ父字ヨ
母字よりあるハ父字を
反字ヨよて父字初く
ことなるべしく

○二重反ハ三字ヨ

○三重かゝるハ四字ヨ
二字反も三字反も一反
おゝゞ反ヨあり上下
とのゝ一反よりゝて
同じことゝ

初段	あ	う	さ	た	か	た	な	ま	や	ら	わ
二段	い	き	し	ち	ふ	ひ	み	い	り	ゐ
三段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
四段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
五段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を

上のくりふりて く を二字あふいちんとあらバ きつとまべし
上のくりよりて き を二字あふいちんとあらバ しつとまべし
上のくりよりて つ を二字あふいちんとあらバ ちつとまべし
上のくりよりて ぬ を二字あふいちんとあらバ ねつとまべし
上のくりよりて ふ を二字あふいちんとあらバ へつとまべし
上のくりふりて む を二字あふいちんとあらバ みつとまべし
上のくりよりて ゆ を二字あふいちんとあらバ えつとまべし
上のくりふりて る を二字あふいちんとあらバ れつとまべし

○郭よのべ詞づゝ行ありて所をきんして けゆ 竜を
んゆて そをとまるとしとべバ

古人の 秋萩の多ちまめれバきりしたゞ帰めこゝ中ちバ多しき
けゆふしきとあり多ハきりしきを日ひやれハ
多移めごとくやしるバ多しべきとゝいふをとされ
バ多るべきのをのきく三をなハ「ゞ」るの及くゝ中ゝ
及けゝけきゝ及きしかゝつゞわゝるきとまるゝ

愛白ゝ

名月や小國日和さゝわまき
是ハ月やおもこのゝ山ゝぶひれやそ下のきいゝさゞひのやれ
おもびゝ是もゞるべきおもこのおゝけ白ハ月の秋乃佳をゝ
つゞせう又
上ゝれゝうまゝぐひてゝもまるゝもむゝぶ時ゝを
としてハ一字ゝゝぶゝハゝつゝもむゝぶゝ
ひ森の尾ゝ鉈ゝ猫の衣
これゝハ利ゝりゝて鉈もゝとゝいひてハ一字ゝたゝゞれバ
ハゝつゝとゝりゝつゝの及ゝを鉈ゝとゝくバまるゝとゝむゝぶ格ゝ
是ゝまるゝあゞゝくゝてゝふゝゝもゝへゝつゝもゝゝまゝもゝハゝつゝもゝゆゝと
えゝつゝもゝおゝうゝる。ゝもゝ第ゝうゝれゝつゝもゝよゝふゝゝうゝて格の
定ゝりゝるゝをゝのゝとゝいゝめゝへゝ

彩良今
歌ゝんゝまゝれゝゝゝ

無季の發句

句法

季あり／季なしハものいひざまふりていふも春／はなを
も花とはいへ いふも秋とはいふ いふも秋とはいふ
／又季あるもの／なしハ
季なしとなるものとハ
國名　郡名　名所　旧跡　故人／名　神佛　年
季なしとなるものとハ

いく年ぞ白髮も神の光哉　玄末

此句／髮ハ下より文字なりハ下ごとにあれば髮
かみ／ばされば下ふ引ふ／ものいふ／これハ神とつ
を季ふ／なるとハ

物ゝ／や貸ぬ中の月と花　太祇

花ハ貸の年／月／花ゝ／やのと歌屋のやうに切
／／これ／ハ貸の中ハ月と花とつふを季ふ／／

月花の是やまことの友ならん　太祇

此やハ／／／ひのやく／ゆゆ言ひて逢と為りて／あり。
二字入てるとてふをと合て字十九の格／是ハ月花の
あ／逢あるといるが故人の名ハ／／／も聖人の夢／／
て／／逢といるが季／／／／ゆ

歩行杖つき坂を落るか　太祇

是ハつえ／／坂を季／／／／ハ／／／／
／／／／

うり山の端のうらまつかぜ　うらまつとうふ
さえ　ちぐて　らまつばとふ詞ハらばをのべ
たるうら葉えらまつう　四字を三音反ふ
それバ　らとづまるを下ばを略てらバ
あるうり

あふとなく芝吹風も　枝風
花ハいろある秋のけしきをうくるやゝ　ゆ見る上の句
うぐいハとふぞ字あれハたゞ詞あれハちのむすびあれ乃
ふ　ちうり　ゆ　り　と　ふ　り

波さしのぶるさしつ　藤ぬ枝ふ　鬼貫
花ハ題ハ待意の白人これ　もいろもそのあとゆ
つ　ハあぐらとうふうつてとべてつとうふ詞ハ波さしの
あぶるさしつとうふつをたゝみてとうふを岩べ

物の名

花ハ半そ　ソ　神　ち　ふ
こ芳　ゆ　を　こ　て　入　ふ　ち　る　白

ふ枝を尺よ　ち　の　田　ち　家　の　反　ふ　立　空山
花ハ　ち　る　の　表　の　反　ふ　立　ふ　反　を　尺　よ　と　下　初　ち　て　切　り
立田川をたてそれふ　ち　る　白

鶯ハふつ　ゆ　ち　ゆ　ち　り　あ　さ　嵐　後方
花ハ　知　あ　ゝ　ゝ　か　も　ハ　ふ　た　ら　ハ　そ　れ　ち　り　と　知　り
あゝふ　祢　の　こ　や　し　ろ
ふ　ふ　せ　り　を　あ　ら　ふ　祢　の　こ　や　ち　ろ　く　香　ら　ん
あ　し　う　あ　へ

日
津の國の難波ちゝりふつる面ハあしう　あへ　ゝ　元　元　尺　ち　る

廻文賛白

村萩ハ風も吹とせの萩をらん　　賓山

[illegible]　　月

廻文の賛白作りやうハちらき碁石へ假名をかき中の一字ハ紙へ書て表方同字を八つゝ並て才を

[illegible]　[の]の　さ[の]さ　[illegible]の[illegible]　も[の]も

此歌ひをいろも考へ並て表方同字を並うへ人名て作るへしさて詠ゆて[illegible]そのひを改むべし中の三字ハ歌林良材小自

ムラヲイハカセモ[ノ]モセカハキヲラム

○上ふあけうてふを波の格歌白ふあるハ結ぶおせろ云ふハ此おりふもくさ此格あれとも歌白ハ詞みしきとのゆゑいひうる紀格ハ紀白おゝ一句ハ詞おぐきゆゑ二字ふそのゝる格おれとも歌白ふハうゝ二字ふそのふとハ中務集

花をさそ人やをるゝ。そてをぐわしら敢あゝ歌方をいろふりハせうん

此そのさハしりをかりうちうふ歌ひのやをる。と結び て切れハ。と文てをゝつきて二字ふそのゝり此格ハ文章ふ和ほう伊勢物語ふそのさのゝんとそと二字ふそのゝるハ

「三節あるゝるゝんゝ紀法男ぞわてうん」とあゝをうゝ

「ものハぞのさのゝんゝ」

ものハぞ此さのゝんゝれハ下ふむゝび辭ある格ゝもおふ同ド格ふて二字ふそのゝり二字ふそのゝるハをゝべてゝ文字ふ仁をたくべし幼任彦の記ふ来るも此格あり

古写本の方ハ

賢愚文質のひとしからぬもいづれも幼の振まなざんとぞ思ひ
捨てふしぬ　とゝのり是ハ定る格を切らるを思て文て
下へつゞきて所詮かゝりあれハぬと第ゝり又下本の方ハ
いづれも幼の振あとぞ思ひ捨てふしぬ　是ハ文章の第りうれハめるといそぎれハ
とあり是ハ二字ふゝのゝども親ひの辞ゝりかゝる所ハぬるを結ぶ
べき格あるにぬと第ゝるハ変格と文章ゆゑ下へはゞるゝ不ハ
変格あるもあれど是ハ文章ゆゑ第りうれハめるといそぎれハ
ぬとあるハる。又字を切ゝ毎をゝゝ毎をゝゝほ人たゞすゝ乃ゝ
二字ふゝのゝ変白人くざれハ人幸あてゝ毎
○玄事秘ふ先師曰玄義之切字ふ用る所ハ四十七字皆切字と
用ざる所ハ一字も切字あゝとあ雅ども是ハ切字とを除く
ゝゝてゝふをゝ所とゝのゝをさゝせんとの戯言と知ぬ言
あてゝ第るも十八十九二十ゆゑ格あれハゝのゝを知るゝゝたゞ
切字とゝふハ

く　ま　ぢ　つ　ぬ　ふ　む　ゆ　る　り　を　き　ひ　し
とんゝ学べゝかくおあゞこゝをゝく学びもいゝるハてふをはのゝゝのゝ
をはゝゝせんゝあゝおのれもいとあゝゝ時ハ書中菴葵太
子知亭吐月が門ふ拝びて私が言のゝいひつゝてふを彼乃
ゝのひを魚彼とあゝゝをゝひゝこゝをゝ学ゝ人だゝゝ学おのれが誤りあゝゝこゝを衛
学年集ゝてゝ是りおのれが脳を今ゝふゝ学ゝるハゝ学ゝ人の
おゝりをゝゝをゝぢめんゞたゝなりゝゝりをゝみ付ゝきハ
ゝゝ人の病ひあるゝのゝそれ病ひあるゝ人ハゝのゝゝゝれるゝゝば
友ゝもゞゝれゝりおゝゝれるゝのを友ゝゝゝされゞゝゝれゞひのゝ
あゝりて誤り彼あゝゝゝむゝこゝゝゝて孫ゝ老ぬ略の書ゝが変
心集の序ふんゝ乃師ゝあゝゝも心を師ゝもゝゝゝなゝれゝと
有是を用ゝ所ゝゝゝ病ひも年ゝゝふ来ゝゝゝきゝふ来ゝゝて不
を彼ゝゝゝのひも未集ゝゝゝゝゝ彼いゝゝゝゝゝゝゝ

ありあはバ大せ紙が戯言もとゝのべ一部ふ示ふ事とゝ
そゝそこそいへ八一をあ集ゝいまゝとハあ一

○初学抄ともゞ〻歌白城考る時始る所をゝ引て示を
度ハおのつゝそゝをれるものあれバんなかゝべゝたゞみ文字に
二の字へて七文字ふ志一七文字を二文字とりて五文字可
志一一の句とこれ句を入ゝゝ志ゝべゝ侍よれやゝは似る
べ一金葉集ふ

春ゝゝもふ如ちゝ春の蔭まゝゝ人せゞや人ふ歌まれけ一紀を
長ハ歌まのけ一きを人ゝ人せゞやゝもいそゝるをかゝ四字二字
三字四字ふいゝるもちゝゞゞふりてゝ此格 建仁三年国九月
仙洞奇合又月清集ふもられる紀大伴さて歌白ふゞりて
始ふてふをそのゝのひを改むべ一又二の句ハ七文字の句
一めをでといふこゝありゝ句ゝゝゞ
詠ふかゝれりんせて花橘ヒロキノハル。

長ハ十九ハ抜ゝ此ごとゝ二の句づめをでとゝゝバ切れぜ一て
下へ続ゞゝ志あるものなゝ紙つゝ志べき所をもでとゝ一あ
ゝのひゝめる句もいゝふおほゝり八て引て と前ゝる句ハ文の
例を以てをそそ下よゝ系情をふゝゝまをて前ゝゝるゝのて
たゞ上へ続ゞんと思ひて二の句つめ所でとゝゝゝバ志ゝもなゝ飛
二の句づめでよりかりて動ぬ言ゝて前ゝるハ志ゝよりゝ
て用拾差別あるべ一でハつゞくゝものふて切ゝゝのふハ行ゞゞ
○やハ歌島の主まつきて物の物ふ とゝよ主あるハ切れいも歌
島のゝゝもあゞゝるふおのゞまゝた物と切らんあどゝゝハひが
ゝゝゝ又ゞゝ切ゝき所をやとゝゝあも例ふ一志ゝふ此俱
凡ゝとせあまりあゝゝ引ゝゞゞゞ

○あゝ人てふを改ふ所の詠書といふ抽を又ハ平平ハ七つの
やとゝふあり又詞ハ首尾といふものの所ハ是ハ七つのやとゝふ
ありて此句ハ五句と附句の詞ハ中ふのゝ長短ハ方ふつく
ふ所ふハてと為るふと為るとゝふことを考へ為りやハ疑ひの
やと雑のやとふいろくの名をつけ為り五方ハ疑ひのゝ

詠書	口合のや	又やゝん老の春ハ花あれもん
詞首尾	口合のや	水やのむち用ゐて涼しかふ
	ひやハ五句の切字ハ成平句のらんと為ふ時も	
	よゝてとゝも為ふ	

と有是ハ二句ハ疑ひのやハ詞ハてハ結び詞ハてハ結びて切り
詠書の方ハ疑ひのやをゝんとハ結びてハあるもゝんとものゝ
ゝり為てゝんと切ゝり 詞の首尾ハ方ハ下より上へゝもゝ
用ゐて添ゝきふ水やのむと切ゝり又五句ハ切字ふ水
成とあれども切やハ上ふいるゝく切字を上ふ更てやとゝふ
あれハ切やと疑ひのやゝハ別ゝ又てとも為ふとあるハ

附句の時疑ひのやをむすび詞ハて結びゝれハ下ハいやゝ
いゝゝれハてとゝも為ふとゝふことあるべし

詠書	切や	散花や嵐ふつれて走るあら
詞首尾	切や	御稲の穂や志ゞ紅て茎の紅ゝ
	ひや上ふある時ハてとゝも為ふ	

と有これハ切ゝやふハあゝ二句ゝもふ疑ひのやゝれハ下ハ結ん
むすびて切ゝり 詞の首尾の方ハやハ五句ふたゝり御稲乃穂
をゝくゝゝをふハあゝ尾志ゞ紅て茎の紅ゝるゝ時疑ふゝ
なれハ御稲の穂ハ志ゞ紅て茎や紅ゝらんといふべきやゝり
又てとゝも為ふとゝも為ふとあるハゝたゝひのやゝれハゝ

詠書	拵や	かくしても方のあるべきと思ひきや
詞首尾	拵や	平泉あゝろの月ハ拵ふや

と有詠書の方のゝ云のゝぎハ切ゝ格ゝを上ふ更てやとゝふ
ハ切ゝゝやゝ為てゝゝ思ひきやとあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やハ拵ゝをあゝゝもの又 詞の首尾の方ハ平ハ紅紅黄ゝて

杜若や赤と紫長のやみて切るやうに

詞之尾　鍛ひのや　けうとやとぞ室ふそ物をこあつえん
けやけ上ふある時ハ　でとも　ふとも　ゆ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
高やあくらん又うたゞび拵るやあり　神あるせとや
出もちとれとやの鍛ひえ

と有　此書の方ハ鍛ひのやなれ白あり　詞の之尾の方ハ
鍛ひのやとぞ　一ツ共むすび詞ふてらんとあこゆるこゑ例
も有　こゝろうふ　ふ　ふ　

山や櫻や杜鵑やたづねきあるをやの字ゆゑ
ちさみへるれハちさやともいへりてともも
ゆゑ之

と有此ハ二句ともに同一体句之仕中のやハ同字の上に
ヤ何ヤカモ　ヤ何ヤカヤ　といふ里語を入れて
今之る雲云や雨　ヤ何ヤカモ　ゆ日の入て
雪を拾櫻や櫻　ヤ何ヤカヤ　ゆ雪之て
とうとる時ハ雜のやれ之も哉之也

哉書　ハのや
詞之尾　ハのや
二句

今ハちやちとと同ゆ名ゆて
さらに春風ハよるれど田舍之て
まつやや手月八日の待哉て
ゆゑも哉之

山やてとも
と有哉書の方ハ人々ハちや此ハおと云ふ字の訓あれハこゆ字
ちれ数ゆハ人々ぬやこちらゆも不及 詞の之尾の方ハあるもやハ
ちもよびあり哉やともいひて新のやあれハ切を出ちらうげ
ちうやこちれハてハいるやゆもいちるれハてともゆゆもいちるとと

いちこちこれハ所白れ此のこと切いふあるべし山此句ゆ
ちる雪白ハ春月や鶯のつくくあるびあて これハ切字
あり ちるびぬつともあり ちをて と字語ちうこと上も
いれどゆと雪ちるハ紙雪や宮より神ちあハやちる これも切字
あり 此ハ宮より神もあるやゆぞ ともあしバ切ちぞ みて
ちのへども みあてハちのちに又 山て みて で あくゆ
ちゆ ちゆ ちゆ

たのさこのやは詞句も「ゆふぎ」「ゆうぎ」とありしをやと
写し誤れるこのう

哥書　そのや　志賀の浦や在原る舟のこぎ出て

と有初句音尾の方ふそのやとよふハ哥ハ詞句と同じやゝ志ゞの浦やさゞ波や琵琶湖やけらゝ志ゞの
の彩ひハおゞもるやゆゑ雑のやありたゞ志ゞ志てゆきさる
やゝ見ゆる切る赤あし見近詞句あゝ来ふ

たゞ句もゆゑ哥無有べゝ又上ふやとゆりてゝと
当るあハとゝ字ゆゑ押へ点を当ゝ上より
三つあハ口合のや四つあハ点のやゆゑ彩ひのや
切やゝハ少あハ中のやたゞあハ点しのや十七あハ拍やゝ
中のやハ点きゝやしもいゝ秘出べゝ

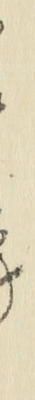
と有これハ世ゆくゝ詞句ゝ点ゝ点ゝていくつやと張れる
ゝのふあゝ点ゝ点ゝふゝてハいづれの示あるやといふべきこ
これの彩ひの物もゝ点ゝ点ゝあハ詞句も一四ゝ分詞句も正

しくこゝ詞句ゝて志ゝ点ゝる哥ゆゝりれども年城ゝゝれ
ゆゝ秘ゝ写ゝ写ゝ張り世ゝ点ゝを芸ゝ書ゝふハたゞ秘出べき
点ゝ点ゝ点ゝゆゝ点ゝゝふかゝゝ点ゝの和ゞゝゝ点ゝの点ゝ味て
志ゝ点ゝ点ゝふゝて点ゝゝの世ゝ点ゝ点ゝ詞句ゝも入ゝ分詞ふいゝべき
こゝ点ゝをゝくいたゞひハゝくゝ点ゝあゝふゝあゝ切ゝ点ゝ
ゝのゝ点ゝ点ゝる人ハ点ゝやゝとハゝおゝとゝふ字ゝ訓ゝ点ゝ点ゝ
詞句ふいゞ世ゝる哥ゝて点ゝ志ゝゞゝハ初学ひのゝ点ゝゞゝ
ゝゝゝゞ書ゝゝゝのふあゝ点ゝ点ゝたゞひゝもゝゝゝべきゝのゝ
ゝて点ゝふ点ゝのゝとゝのひハ詞句も志ゝゝ人も志ゝてゝゝ楽ゝ点ゝを
ゝゝゝ点ゝゝゝのゝゝ志ゝゝて詞世ゝるハつみふゝゝ点ゝゝ

饒舌録下巻終

文化元年甲子仲秋刻成

同十三年丙寅季冬發行



日のあしへ

明治開化和歌集　全二冊
同名家新題林集　全四冊
やまとことばづ久　全一冊
俳諧三千題早引　全三冊
仝　一覽集　全一冊
仝　七部集大鏡　全七冊
仝　乙二七部集　全二冊
俳諧發句類聚　全二冊
仝　千題集　全三冊
仝　新五百題　全二冊
仝　新名五百題　全二冊
仝　饒舌録　全二冊
俳諧清風題林發句集　全四冊
俳人百家撰　全一冊

書肆

東京市
目黒十郎支店
京橋區南傳馬町二丁目五番地

財布
杉原文
けさ